

---

# UNDER THE ROZE

バニラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

UNDER THE ROZE

### 【Nコード】

N5299Z

### 【作者名】

バニラ

### 【あらすじ】

とある秘密を抱え、単身海を渡って来た少女、景夕凜。母の形見の短刀と極厚辞書を手に、彼女が選んだ就職先は『黒十字軍』。

主な仕事は魔獣を葬り去り、町の人々を守ることです。そして、副司令官のお小言に耐え、司令官の無表情に耐え、言葉の壁に耐え：あれ？ 魔獣蔓延る世界を舞台に、少女『達』の最後の物語が幕を開ける。プロローグのみブログ「たまごの日記」で公開。その他に番外編なども載せるかも、です。

## 00 プロローグ（前書き）

初投稿です。至らない点等あると思いますが、よろしく願います。  
現時点では主人公は文字でしか出てきません。

## 00 プロローグ

今宵は満月、血に酔いし獣の唸りが空高く響く。

1月23日、午前2時30分 第5領域エーゼン街東にて  
戦闘開始

闇に棲み人を貪る黒い野獣、『魔獣』が世に蔓延り始めたのは、およそ二百年も昔のことだと言われている。それまで何の障害もなく暮らしていた人間は、突如現れたそれらの脅威に為す術もなく、ただただ無様にも喰われるのみだった。

『古代見聞録』より抜粋、宋 そう しんりょう 新涼 著

重々しい獣の絶叫、鳴り止まぬ鋭い剣戟<sup>けんげき</sup>、猛々しい雄叫び、肉を断つ鈍い音。纏わりつくように濃厚な血と獣の香りの中、夜に溶け込むような黒を基調とする軍服を着た男たちが、サーベルを片手に街を東奔西走していた。或いは人の何十倍もある巨躯の『魔獣』と死闘を繰り広げていた。

「エドモンド！西方援護隊に緊急護衛要請！そっちにアレが行きそうだ！」

「やばい！サムが右足をやられた！おい、救護班こっちにいないの

か」

「おい、こりゃあ珍しく長丁場になるやもしれん、住民に厳戒令を敷いとけ！」

「『魔獣』は現在右下腹部、尾を負傷、左前足を損失しておりますが未だ激しく暴れています！やはり心臓が頭部に決定的な損傷が必要なようですね…」

「長官、どうします、このままじゃ結構痛手負いますよ！！」

長官と呼ばれた男は眉間に深く皺を寄せた。まだ三十代半ばであろう彼からは、全てを拒絶するかのような冷たい雰囲気醸し出され、また、整った精悍な顔は無表情のお手本のようなものだから、この有事の際にもどんな緊急の用件があっても、彼に慣れた高官でなければ誰も近付きたがらない。寧ろ彼も戦局を見据え勝利を勝ち取るために、なるべく気が散るのは止したいところであつたから、誰も近付かず邪魔をしないでくれることはありがたい話であつたのだが。

現在の状況は圧倒的に男たちに不利な形だ、相手は近年稀に見る巨軀と攻撃力を誇り、日常的に出没している雑魚とは違ってそれなりの知恵もあるようだから厄介だ。しかも昨日降った雪の影響で地質が悪く、たまに凍っている所もある。それが『魔獣』たちと闘い続けた猛者たちの調子を崩し、怪我人も続出している。今もサムという凄腕の剣士が負傷して、救護班に担ぎ込まれたところだ。

男は内心歯噛みした。一旦退却するという手もある。だがこれだけ被害が出ているのだ、すぐに体勢を立て直して出陣、というわけにはいかない。それにあれを放っておけば更なる被害が出るだろう。だがこのまま闘い続けてもらちが明かないのは自明の理だ。さて、どうしたものか。

男はちらりと隣に視線を投げやった。

「お前はどうか考える、エイス」

「少々、考えがあります」

男　長官の隣には、いつの間にか音もなく、青年　エイスが一人、佇んでいた。

こちらもかなり整った容貌をしているが精悍な彼とは方向性が違い、美しく艶のある、危うい美貌だ。陳腐な言葉を使うべきなら、

天使か悪魔か、どちらかを人は指すだろう。

そんな相貌を微かに笑ませて、男にエイスはそつと耳打ちした。

「薬を使いましょう。王宮内の薬所に睡眠導入剤を片っ端からかき集めさせて、使えるだけ使って、アイツを眠らせましょう」

「住人に被害が及ぶぞ、と言いたいところだが、お前がそう言うんだ、何か策があるのだろうか」

そう男が含みを持たせた言葉を放つと、エイスはさらに深く笑んだ。

「この前の新人隊員が、使えると思うのですが」

これは、ひとりの少女が剣を振るい、闇を駆け、その生を全うするお話。

終わらない物語を、哀しい末路を、彼女の手で、断ち切るために。

## 00 プロローグ（後書き）

クリスマスまでには何とか次を書き上げようと思います。  
ここまで読んでくださってありがとうございます。

## 01（前書き）

今回は主人公目線のお話です。何か、主人公の状況説明してるよ  
うではないような…。



幼い頃、手に握らされたのは、玩具でも菓子でもなく、小振りの短刀だった。

黒い柄の、やけに不気味な光り方をするものだった。それも嫌に良い切れ味なものだから、誤って自分の手を何度かざつくりとやってしまったこともある。今思い出しても背筋がぞつとする。右手私は左利きだ　に真一文字に走る線。やがて流れ始める、強烈な赤。痺れるような痛み。手だけが異様に熱くて、でも体は寒くて。

ああ、こんなこと思い出しちゃだめだ。他にも色々と思いだすじゃないか。

そう思っても、すでに遅い。私の頭の中に、水が湧き出すように思い出があふれる。

いいかい、お前は我等が里の「楔」にして、「贅」。彼の国に出向き、しっかりとその身に科された役目を果たして来なさい。分かってるね。お前の役目は

ふと、最初に思い出したのは、この言葉だった。

厭々聞いているうちに慣れてしまった嗶声。嗶れた声なのによく通って、いやに冷たさを感じて。

「はい、巫女長さま。私の役目は、……………」

思わず口から「あの時」答えた内容が突いて出た。いかんいかん。こんな時まであの皺くちゃババアに従ってなるものか。私はとりあえず一通りの悪態について、顔を真っ赤にしながら怒るババアの顔が想像できたので溜飲を下げる。

まあ、あの人は怒るなんてこと、しないだろうけど。

それから数十分のあいだ、私は懐かしくもない思い出に浸っていた。というのも、今私がいるのは仮眠室で、そこにある寝台に横になってからだ。次に仮眠をとる人が来る時間まで、まだあと20分程度残っている。だが残念なことに、私は布団が変わった慣れるまで眠れない性質で、ここに慣れるにはあと2日くらいここに居させてもらう必要がある。はい、むりでしょーね、ごめんなさい。

私はそつと起き上がった。眠れないうえに何もやることがないなら、もう次の人に変わってあげたって何の問題もないだろう。

着替えようとそこら辺 たぶん床だ。今、目があんまりよく見えない 無造作に投げ捨てていた上着を拾うと、ポケットのあたりから何かが飛び出す。

「あれ。こんなとこになんか入れてたっけ」

訝しく思いながらもそれを拾うと、ああ、と私は溜息をついた。まだ入れてたんだ。

それは、綺麗に折りたたまれた、1枚の地図。世界地図、とでもいふべきだろうか。だが安物の市販のものだからか、大陸の形や大きさは歪で曖昧だ。私はそれを開いてベッドの上に広げた。

その地図の東よりの方にある、小さな国がいくつも集まってでき

た大陸に私は指を這わせる。東大陸の北付近に位置する比較的大きな国のところで、指を止める。周りを森で囲まれた、よく言えば自然豊かな、悪く言えば森のせいで近隣国から孤立している、そんな国。

「ハツじん  
洗仁国」

私の、愛すべき、憎むべき、故郷。冬になれば雪がしんと降り積もる、豊かでも貧しいのでも無い国。

またゆつくりと地図上に指を滑らせる。今度は西に向かって、国境を、森を、山を、川を、そして遂には海を越え、西側に位置する大きな大陸に指は向かっていく。

今度は西大陸の中央に鎮座する、一番大きな国に指が止まった。西大陸一の軍と財を誇り、世界最強とも呼ばれる国。戦女神イルデシアに、愛された国。

「イデルシア大皇国」

私の現在地。人々に平穏が約束された、安息の地。

私は約二週間前、洗仁国から遙か彼方にあるイデルシア大皇国へと、海を渡ってやって来た。まあ、ちよいとひと仕事するためにだ。ああ、確か1か月と2週間かったのよね、長かったわ。

私がこの国に初めて降り立った時、まず一番最初に思ったのは、『眩しい』だった。1年の殆どが冬状態の我が故郷はいつも雪雲に

覆われているから、太陽を拝むことが出来るのは両手で足りる程度。だから必然的に国全体が暗く、どんよりとしている。それが国民性に現れたのかどうかは知らないけれど、皆微妙に否定的で暗い性質だ。私みたいにはっちゃんけた性格の奴は滅多にいない。関係ないことに話が逸れてしまった。話を元に戻そう。

まあ、そんなわけで『四季』があるというこのイデルシアは太陽が晴れている限りいつでも拝めて、光が降り注ぐようで、とても『眩し』かった。人々もみんな笑っていて、国が違えば人も違う、ということのを改めて思い知らされた。

（いいなあ。みんな、笑ってる。幸せ、なんだなー）

私の国の人たちは、幸せなのだろうか。脳裏をよぎった問いに、私はスツキリと答えを返せなかった。豊かでも、貧しくも、ない雪国。これと言って大きな戦もなく　小競り合いはあるにはある、ただ安穏と農業や酪農をしている人たちの住む国。　幸せ、なのだろうか。同じような時を毎日静かに暮らしていくというのは。

でも、私は確実に不幸だった。いや、今も不幸で、惨めだ。

コンコン、コンコン

唐突に聞こえてきたノックの音に、私は思考を中断した。まさか、「彼ら」に何か　！？常時左足に隠してある短剣があるかを確認して、私は扉を開けた。

扉の向こうには、やや壮年と思われる軍服姿の男性が立っていた。

『イーモス中尉!』

『ユーリ嬢、今すぐ第5指導室までおいで。緊急の指令が出たんだ。一応武器も用意しておきなさい』

『イエス・サー!』

イーモス中尉は早口でそう伝えると、さっさとどこかに去ってしまふ。きつと他の隊員にも伝えるためだろう。地図云々の時にベッドに放り捨てていた軍服の上着を羽織り、ボタンを留めながら廊下を急ぐ。この時間、常なら消灯時間も過ぎたところであるし誰もいないのだが、街で掃討戦が行われているため援護要員がいつ呼び出されるかもしれないし、皆緊張感あふれる顔つきで廊下にたむろしている。

そのたむろしている中の一人の顔に見覚えがあり、私は足を止めた。童顔で赤茶けた髪、小柄な青年。こんなに仲間と呑気に話してるなんて。イーモス中尉の話、聞いてないのかしら?言っておいてあげなきゃね。とりあえずお話の途中で悪いけど、呼びかけてみる。

『ええーと。グロツク・アーサー?貴方、イーモス中尉の話き...』

『!?!?!え、なに、おれ、呼んだ!?!え?え?』

私の呼びかけに、慌てふためく彼。あー、またやってしまった。私はもう一度、今度は分かるように彼に話す。

「ぐるつく・あーさー、アナタ?アッテル?」

「お、おう!」

「イーモス...サン、タブン、ヨンデタ、ダイゴカイギ、シツ...ワカル?」

「え、○?!?!?○ ?!行かなきゃ!」

途中途中何やらわからない言葉があつたが、どうやら一応彼に言いたいことが伝わったようだ。ほつ。

去り際、こんな会話が耳に聞こえてくる。

「おいグロツク…。アイツ、何？なんかよくわかんねえコトバ言つてたけど…」

「ああ、あのさ、アイツ○＃でさあ。確か…そうだ、コージン国、つていうとこの生まれだよ」

「コージン？どこだよそこ、聞いたことねえぞ？」

「あ！俺知ってる！東大陸の＊＃＠＋国でさ、なんも　　とこがねえつていう噂のトコ！」

「えー、○？かよー！」

あははははは…

何となくわかる。今確実に馬鹿にされてる。あとで覚えとけアイツら。

でも、馬鹿に？というよりも、興味津々なのは彼らだけじゃないようで。

「おい、あれ、子供じゃねえ？誰の妹？」

「違う違う、あれだよ、一時期噂になつたじゃねえか。女で物好きな○＃…ほら」

「ああ、あれがか、…あんま美人じゃねえな、ハハツ」

「子ども好きな奴もいるから、とりあえず客には困らないんじゃないかねのハハハツ！」

…なんか嫌なうえに変な寒気がする。おかしい。

そんなこんなあつて、私が第5会議室に到着したところにはすでにイーモス中尉は中で椅子に座っていらつしゃった。でも、他の皆はいない。どうしてだろうか。

「オツ、オクレテ、スミマセン、あ、アトミンナハ」

「…だいぶ言葉にも慣れてきたかと思つていたけど、その調子じゃまだまだのようだねえ。ユーリ嬢？」

怒られるかとドキドキしていた私に投げかけられたのは、柔らかで含み笑いの混じった声だった。

「私の前ならいくらでも母国語を使いなさい。まだ無理はしなくていいから、ね？」

「はい！ありがとうございます、中尉！」

「あ、そうだ、君以外、今日はここに来ないからねえ」

「…は？」

全くアーサー君が来たときはびくりしたよ、という彼は、啞然とする私に席を勧めてくれた。

座った私から一枚の紙に視線を落として、彼はしみじみとこういつた。

「…君の御婆様が君をこちらに寄越す、と言つてきたときはどうなることかと思つたけどねえ」

「巫女長さまと私の事情に付き合つていただき、痛く感謝しております」

何を隠そう、この中尉、私の事情を深く知る一人である。奥さんが私と同じ故郷のヒトらしい。詳しいことはよく分からない。あと、巫女長は私の御婆様に当たる人だ。ちよいと仲たがいしていて御婆

様と呼ばせてもらえないけど。

『いやいや。感謝するのはこちらの方。君は強いし、何よりかわい  
いしね。総長も褒めておられたよ、君の剣技』

『…意外です。私、試験の後けちょんけちょんに貶されまくりまし  
たから』

剣技を曲芸と勘違いするな。力が弱い。腹ががら空きだ、柄の  
持ち方もおかしい、なんだ、私に何か言う事でもあるのか、その顔  
は。せいぜいエイズと同等の戦力になってから言いに来い…

無表情の上につらつらと抑揚のない声で述べられる批評は、まる  
で降りかかる氷柱のようだった。試験後でただでさえ精神・肉体共  
に疲れていたのに、あれはもう拷問に近かった…。

『でもね、彼は滅多にあんなに喋らないし、才能がないと思った奴  
にはとことん無視を決め込む人だからね。君のこと気に入ってたん  
だよ、本当に』

『そう、なんですか…』

『ああ、こんな話をしていると、君が入ってきたときのことを思い  
出すねえ。』

あれだよ、剣と一緒に軍の入隊書貰いに、ヒッ、ボクのトコに超  
極厚の辞書を持ってきたときにはもう、っプ…！』

だって私、こっちの言葉よく知らないんですもん。

言葉も何もわからない国。私が極厚辞書と剣を手にとって来たの  
は、剣を振るうことを仕事にしている人たちのところだった。

いわば、軍、と呼ばれるところ。



でも、闘うのは人間相手じゃない。

『ああ、こんな長話をしている所じゃなかった！』

『？』

ひとしきり笑った後、中尉は唐突に一枚の紙を手渡してきた。

『いやあ、副隊長のお目に掛かるほどの腕を君が持っているなんてねえ。ボクは本当に嬉しくて。ねえ、きいてる？ ユーリンちゃん？』

『あ、あの、これ、とんでもないことが…』

『えー？確かに無位の隊員がいきなりそんなところに押し上げられるっていうのは異例だけど？いいじゃないか、キミならやれるよ！』

「そんなむちゃなああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああ！？」

渡された薄っぺらい羊皮紙には、以下のことが記されていた。

ユーリン・ケイ   これから副隊長補佐候補生の昇任試験を行う  
今すぐ現場に來い

黒十字軍副隊長   エイス・ミラー

思えばこの唐突な昇任試験通知が、奇妙な運命の幕開けだったのかもしれない。

私と、貴方の。

## 01（後書き）

誤字脱字、疑問に思ったところなど、どしどしお伝えください！  
今回は超グダグダですね…。

何故総長の言葉が彼女に分かったかというところ、あの時くらいには  
結構言葉をマスターしつつあったからです。

あと記号のところはスラング的な意味合いのものを表現してます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5299z/>

---

UNDER THE ROZE

2011年12月25日17時46分発行